

第二節 町 並

1. 町並と町並景観

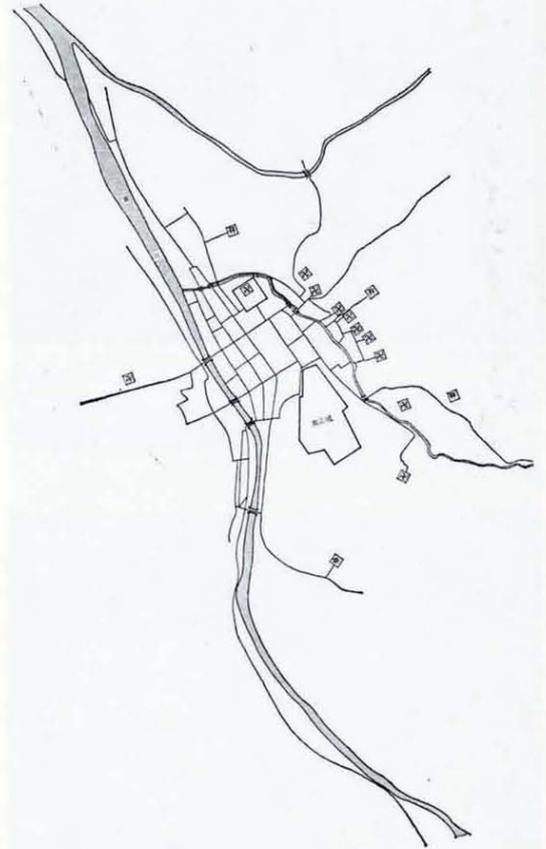
町並景観 古い町並がのこっているというとき、一般的には人々が道路を歩くときに、あるいは町を眺望したときに視野に入るすべてのものから構成される景観が、伝統的な雰囲気を保っていることを意味している。このことは、景観とともに、そこで生活する人々が培ってきた文化慣習などが一体となって古くからの町であることを実感させるという内容を含んでいる。このように町並という言葉には、景観だけでなく、その町の文化とそれを支えてきた人々の生活のイメージが重なりあっている。そこで、この報告の中では、町並と町並景観を次のように異った内容を指すことばと考える。

まず「町並景観」とは、道を歩いたり眺望したりするときに視野に入るすべてのものから構成される町の景観である。高山の場合、町並景観は道路と町家が主に構成する。ほかに看板・柵・塀・標識・電柱などの工作物、各家にある郵便箱・メーター類などの付属物や植栽、背景となる山までも含まれよう。伝統的町並景観がのこっているというのは、これらの構成物が歴史的に形成された一定の規律によって整えられ、統一感を持っていることであると言えよう。

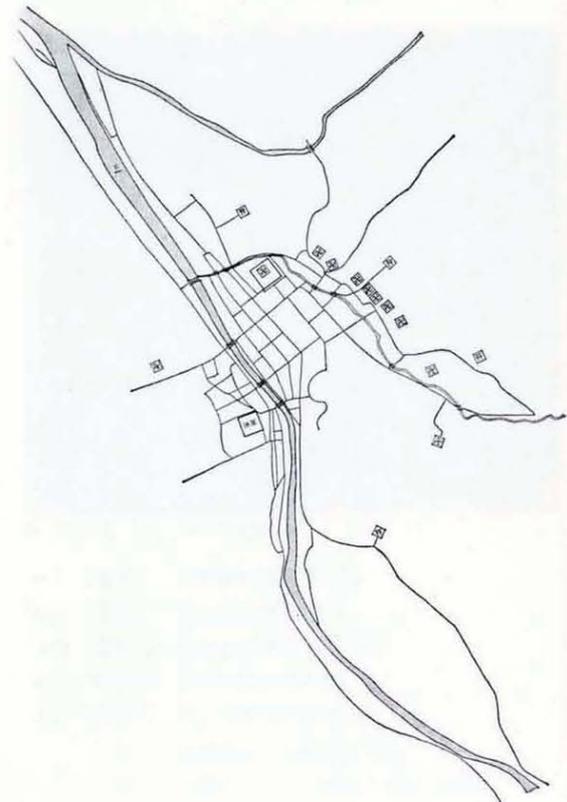
町 並 次に「町並保存」と言われるときの「町並」という言葉は、町並景観と、町並景観を生みだした歴史的な営み、そこに生活した人々の伝統・慣習など、文化・社会生活との係り合いを含めて理解されるべきであろう。人々の生活は、町並景観を構成するもの—高山の場合、道路や町家—によって当然制約される。生活を含めた伝統的な雰囲気も、町並を保存することによって保存されるであろう。

町並をこう考えるならば、町並景観や人々の生活を制約する自然条件や歴史的条件、町並景観と生活を結びつけている状況などを明らかにしなければならない。まず町の性格を決定づけた歴史がある（この報告では第一章に述べている）。例えば「城下町であった」とか、「宿場であった」とかの歴史がある。これに加えて、「道路を広げた」とか、「橋を架けた」とか、「火災があった」とか、町のパターンに関係する歴史がある。こうした歴史の研究を経て現在の町並の状況はどうであるかが明らかにされよう。

また、歴史や自然の中で人々がどのように生活を送ってきたのかを探る必要がある。町のパターンはかわらないとしても、町の中心街が移行したりして住民の生活はかわってゆく。四季折々の生活も生活様式の変化の中で自ずからかわってゆく。こうした変化にもかかわらず、町並がのこってきた状況を明らかにすれば、町並景観を



2-15-a 高山の道路パターン (元禄頃)



2-15-b 同 (江戸末頃)

のこす方向も見出すことができるだろう。

2. 町並の性格

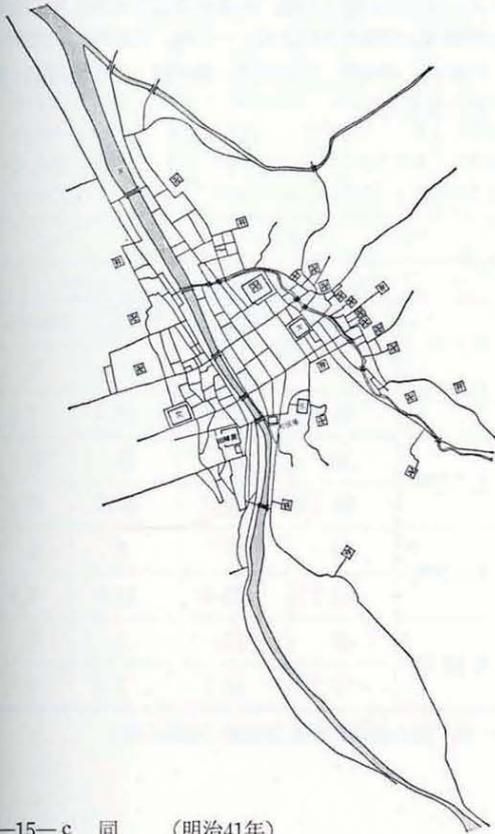
道路パターン 高山市は旧高山町と周辺4箇村が合併して生まれた都市である。旧高山町は金森氏の城下町を基礎にして発展した町である。現在の市街地は宮川によって大きく2分されている。東の市街地と、西の市街地のうち宮川沿いの一部が旧城下町である。宮川以西の市街地は明治頃までに次第に拡大していったもので、大正頃には国道41号線が市街地の西を限っていた。昭和9年の国鉄高山本線の開通で、市街地はさらに西へ拡大した。

高山は「小京都」と呼ばれるが、格子状の街路パターンはなく、南北通りを主軸とする町筋と、南北町筋を連絡しあう形で東西道路を通すという街路パターンをもち、この街路パターンは現在にまで受継がれている。とくに東の市街地では城下町の街路パターンは基本的にかわっていない。町が西に向かって拡大するのに伴って、東西道路が拡大されたり新設されたりして、単なる連絡道路よりもその機能が高まってきている。国道158号線（安川通・昭和20年拡幅）や本局通（昭和19—20年拡幅）がそれで、従来からの南北軸に対して、東西軸をかたちづくっている。かつての南北の町筋は、新しい東西筋によって分断されている。

町の地域割は、東の市街地では城下町の地域割を踏襲し、西の市街地では宮川沿いを除くと地域割ははっきりしていない。東の市街地は三町筋と呼ばれる商人町が核となり、北に大新町と、南に宮川東岸の川原町がある。本町筋は三町筋と平行して宮川西岸にある。これらの南北町筋のブロックとは別に高山駅前に商業ブロックがあり、この2つのブロックを東西道路で連結している。高山市は上に述べてきたように拡大し、構成されてきたと考えられる。陣屋は三町筋・本町筋・川原町筋の南北通と東西道路の結節点に位置している。国道158号線と本局通の東西道路も商店街になっている。三町筋は、国道158号線によって上町・下町に分かれ、上町は本局通によってさらに北と南の2つのブロックに分断されている。

調査地区の道路 道路幅は、上一之町7m前後、上二之町北半部5m前後、上二之町南半部は8m前後、上三之町のうち恵比須台組では3.2m前後、竜神台組では3.5m前後、片原町は5m前後であり、現在はすべてアスファルト舗装されている。道路幅は上一之町と上二之町南半部が広いが、上一之町は昭和29年、上二之町南半部は昭和24・25年の拡張である。とくに上二之町南半部は電々公社ビルの建設に伴って道路幅が大きくかわっている。他の地域では道路幅は旧状を維持している。

道路パターンは、公民館（旧高山市役所）を結節点として南北筋が



2-15-c 同 (明治41年)



2-15-d 同 (昭和10年頃)

扇状に広がる。本局通で分断された南北筋は、ここで西北へ折れて三筋平行する。本局通より北では三町筋に加えて、宮川沿いに片原町筋がある。国道158号線（安川通）より、下三町筋でやや収束しながら江名子川に向う。

宅地割 宅地割をみると、三町それぞれに特徴がある。まず明治6年の地割図^{*1}を考察する。この絵図に記載されている上三町筋の各家の間口を表2-15にまとめた。この間口は敷地間口と考えられ、建物間口ではない。ただし、小・中規模の家の間口は敷地と建物の間口はほぼ一致する。表から、間口4間半以下の家の棟数をみると、上一之町・上三之町では各町の全棟数の約5割から6割、上二之町では3割から4割であるのにくらべて片原町で約7割あり、小規模な間口の家が多い。また、間口八間半以上の家の棟数をみると上一之町・上三之町では約1割5分であるが、上二之町では約4割、片原町では約1割である。上二之町には広い間口の家が多く、片原町では少いことがわかる。上二之町では間口が広い家が多いので、棟数が少ない。

現状の宅地割をみると、間口13間半を越える家は、上一之町1棟、上二之町6棟、上三之町4棟、片原町にはない。これら11棟のうち6棟は造り酒屋、2棟は公開施設、1棟は旅館である。間口8間半以上の家は上記の商売柄広い家と、その他の二・三の例があり、明治6年の宅地割にくらべれば三町全体に減少し、広い間口だった家は分割されて、現在では4間半～8間半に集中する。片原町は旧規の傾向に加えて、分割が進んだ結果、小中規模の間口の家が多い。

恵比須台組では、明治6年の地割をみると間口20間2尺の家が1棟あり、桁はずれて広い。この家の向いに9間1尺6寸の家があって、この2軒がほぼ町並の中央に位置し、その両脇に小中規模の家が並ぶ。この状況は現在もかわっていない。間口8間半から13間半の家が分割され、間口4間半以下の家になっていることが表2-17から読みとれる。

敷地の間口に対して、主屋の占める間口をみると、現状の敷地の間口七間半以下の家では、敷地の間口と主屋の間口は一致する。敷地の間口七間半以上になると、主屋を敷地間口一杯に建てない例がでてくる。この場合、土蔵や塀が道路に沿って建っている。現在では駐車場等になって道路に面して建物の建たないところもある。

軒高 調査地区のうち、恵比須台組・竜神台組・上二之町北半部で、道路に面する建物の軒高を実測した。町家主屋・土蔵・屋台蔵・塀、近年の建築である住宅・倉庫などを含めて約100棟ある。建物の高さがかげ離れて高い、鉄筋コンクリート造・三階建などは実測を行っていない。実測した軒高は、道路面から垂木先端の下ま

*1 高山市立郷土館蔵「筑摩県第二十五大区第二小区 飛騨国大野郡高山町之内 一之町 二之町 三之町 片原町 神明町 三十分之一 簾絵図 二枚之内上 明治六年七月」

	—4間半	4間半—8間半	8間半—13間半	13間半—
上一之町	47 56.6%	23 27.7	7 8.4	6 7.2
上二之町	23 36.5%	14 22.2	19 30.2	5 7.9
上三之町	36 52.9%	22 32.4	8 11.8	2 2.9
片原町	48 70.6%	15 22.1	5 7.4	0 0

2-16 間口規模別棟数分布表（明治6年）

	—4間半	4間半—8間半	8間半—13間半	13間半—
明治六年	9 37.5%	11 45.8	3 12.5	1 4.2
現在	15 57.7%	9 34.6	0 0	2 7.7

2-17 恵比須台組明治6年と現状の間口規模別分布表

	恵比須台組		竜神台組		上二之町	
	棟	%	棟	%	棟	%
3.1m未満	2	8	1	2	3	11.1
3.3m—4m	14	56	23	45.1	10	37.0
4.1m—5m	3	12	8	15.7	6	22.2
5.3m—6m	4	16	5	9.8	4	14.8
6m以上	2	8	14	27.5	4	14.8
計	25		51		27	

2-18 調査地区内の3地区別軒高分布表

での高さである。実測値を3地区にわけて、表2-18にまとめた。3地区とも軒高が3.3m~4mに集中している。軒高と建設年代の関連をみると、大体時代が下ってくると軒高が高くなる傾向がある。高山では軒高3.3m~4mは江戸末期から明治末期、4.1m~5mは明治末から昭和初期、5.3mを越すものには戦後の建築と土蔵などの古い建築がある。恵比須台組の6mを越す2棟は土蔵と屋台蔵であり、竜神台組・上二之町の6mを越える建築は鉄筋コンクリート造や木造モルタルが多い。

この3地区は、調査地区の中では道路幅がせまく、全体の軒高も揃うので、落ち着いた町並景観を保持している。なかでも恵比須台組の景観には統一感がある。

分布図にみる町並 各種分布図をもとに町並の性格を考える。

A 建物時代別の分布

① 江戸末から明治末グループが集中しているのは、恵比須台組・竜神台組・上二之町北半部・片原町北半部・上一之町北半部がある。すなわち全体としては、本局通より北の上三町筋・片原町・恵比須台組町筋に集中している。② 昭和初期グループが多いのは、東西道路の本局通で、これは道路拡幅が実施されて、商店街になったことによる。本局通には、土蔵を除くと①グループに属する建物はない。③ 戦後グループが多いのは国道158号線沿いと、上二之町南半部で、前者は道路拡幅後の新しい商店街であることによるし、後者は道路拡幅による建替えと、電々公社ビル建築等、このグループの建築の占める割合が多いからである。調査地区全体については、①グループが現在の町並景観をつくりだす支配的な建物であり、②グループは商店街に多い。角に建っている建物は道路拡幅のために新しくなっているものが多い。角に建つこれらの建物は町並景観のポイントになる位置にあるが、すぐれたデザインのものがない。

B 構造体別の分布

①グループの木造が調査地区全体に圧倒的に多い。とくに恵比須台組・竜神台組・上二之町北半部・上一之町に集中する。②グループの木造モルタルが多いのは片原町で、①グループと混在する状況を示す。③グループの鉄骨・鉄筋コンクリート造は上二之町南半部にある。角の建物は②・③のグループに属するものが多い。

この分布図から、調査地区は木のテクスチャーで町並景観をつくり出していることがわかる。建物時代別の分布と重ねてみると、時代別①・②グループはすべて構造体別①グループで、時代別③グループは構造体別①・②・③グループに分かれる。

構造体別の分布で木造が圧倒的に多いことは、火災によって町並が消滅に至る危険があり、防災対策が緊急に、万全に実施されな



2-19 電々公社ビル



2-20 町並景観をこわすバラボラアンテナ

ればならないことを示している。

C 階数別の分布

②グループの中二階建が全体に多く、とくに恵比須台組・竜神台組・上二之町北半部に集中する。次に多いのは③グループの本二階建て、①グループの平屋、④・⑤グループの三階以上はすくない。②・③グループを併せると調査地区をほぼ覆うことになる。このことは町並景観として階高がほぼ揃っていることを示している。三階以上の建物が少ないので、周辺の花々が町並景観の背景となる。

時代別の分布と構造体別の分布を重ねてみる。まず時代別①江戸末から明治末グループは、階数別②中二階グループと対応し、時代別②昭和初期グループは階数別③本二階グループと対応する。時代別③戦後グループには、階数別①～⑤グループのすべてがあり、決った階高にするという規律に従って建てられていない。つぎに構造体別との関連は①木造グループは①平屋・②中二階・③本二階グループと重なる。②木造モルタルグループは③本二階グループと対応する。③鉄骨・鉄筋コンクリート造グループは③本二階グループか④三階・⑤4階以上のグループになる。

D 正面様式別の分布

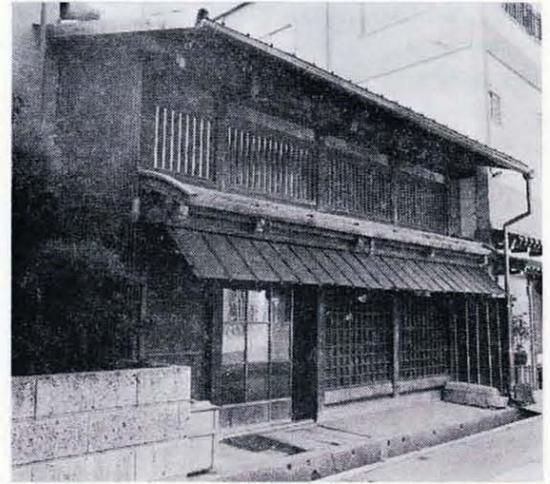
景観に調和している①グループと②グループがもっとも集中しているのは恵比須台組で、つぎに竜神台組・上二之町北半部がある。③グループは上一之町・片原町に多く、④グループが目立つのは上二之町南半部である。

時代別と構造体別の分布を重ねると次のようなことがわかる。まず①グループの多い地区は時代別①グループが多い地区で、構造体別①グループ、階数別②グループの多い地区である。一方時代別①グループ、構造体別①グループが多いのに、調和別分布では②グループが多いのは上一之町・片原町で、ここでは古い木造で中二階の町家ではあるが、建物正面の改造が進んでいることを示している。

また時代別分布では③グループで、構造体別グループでは①・②・③グループに属していながら、調和別では①や②に属する建物がある。例えば、構造体は鉄骨でありながら、町並景観と調和していると考えてよい建物があることである。これは周辺の町並景観に調和するデザインを採用したためである。こうした新しい建物であっても町並景観に調和している例があることは、デザインの工夫によって町並保存が可能であることを示している。このことは、新築・改築に際して、デザインのチェックをする仕事が重要な課題であることを示唆している。

E 用途別の分布

住宅が多いのは上二之町南端部と片原町である。恵比須台組・竜神台組・上二之町北半部・上一之町には店舗が多い。さらに観光客



2-21 軒に腕木を出す町家



2-22-a 町並に調和する看板



2-22-b 町並に調和しない看板

との係り合いをみると、恵比須台組・竜神台組・上二之町北半部に観光客を相手とする店舗と公開施設が多い。東西道路は商店街で、住宅がすこし混る。調査地区全体としては店舗が多い地区という性格が強い。しかも現状では観光と結びついた店舗が多い地区と言える。観光客を相手とする店舗が増えたのは、ここ二、三年のことで、町並保存の努力が評価され、それが結実し、観光客が訪れるようになったからであろう。

3. 町並景観の分析

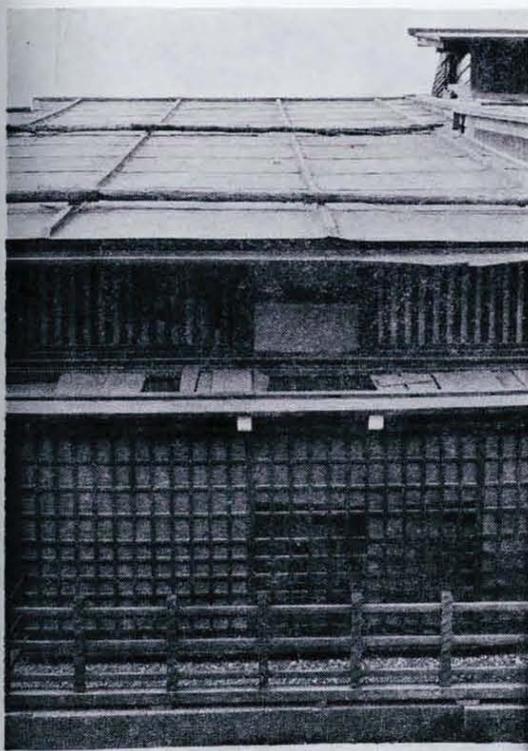
道路と町家 高山の町並景観は、主に道路と町家、その他の建築物で構成されている。まず道路と町家について述べ、次に工作物・付属物についてふれる。町並景観の現状の性格を明らかにして、最後に町並景観の変化を考察する。

道路については前項に述べたように、恵比須台組・竜神台組・上二之町北半部が旧状を維持して狭く、上二之町南半部・上一之町では拡幅されて広い。道路にはそれぞれ側溝がある。恵比須台組では清流が流れていて景観の1つのポイントになっている。公民館前にも広い水路があり、水量が豊富で付近一帯に一種の雰囲気をつくり出している。

道路パターンは前項ですでに述べた。調査地区の道路はゆるくカーブしているもののほぼ直線で、高低差もほとんどない。道路は南北4筋あるが本局通で分断され、ここでやや北西に折れるので8筋あると考えてもよい。道幅はそれぞれ約3m~5mであり、まとまった景観をつくり出す。屋根伏をみると、瓦棒トタン葺が多い。けれども道路に立ったとき屋根面は視野に入っていない。というのは屋根勾配が2寸7分~8分ほどとゆるく、さらに軒先にせき板が取付けてあるためである。したがって町並景観としては、屋根葺材はほとんど問題にならず、深い軒の出と各町家の正面の連続していることがもっとも重要視される。

町家は木造で平入り、中二階建が多い。正面の建具は現状では格子とガラス戸などである。格子は高山独特の形状を持ち、景観をつくり出す重要な要素となっている。一階・二階とも壁は部分的にしがなく、木のテクスチャーと色が景観を支配する。ところどころにある土蔵の白壁が、木のテクスチャーと色調に変化を与えている。

道路と軒の出・庇の出の関係についてみると、軒の出は4尺程で深く、道路・軒高・軒の出の3者の関係は人間的スケールの落ち着いてまとまった空間をつくり出している。つぎに庇の出は3尺程と少く、軒の出の内に納まる。庇の高さがよく揃っていることと庇のデザインがほぼ統一されていることが景観にまとまりを与えている。



2-23 町家の正面



2-24 町並

町家は道路に沿って建ち、その前面はほぼ揃っている。土蔵・屋台蔵は道路から奥まって建ち、塀は道路境にあるので、その付近は出入が多く、町並景観は変化に富む。町家が続くところでは、枠組出格子があるため多少の出入りはあるが、建物の前面は揃うので、変化は少ない。

高山の町並景観は、道路と町家との秩序ある関係、町家のデザインの統一性などによって保たれている。町家のデザインは同じ基調の上に成り立っているが、個々の家のデザインはそれぞれ特徴を持っている。同じデザインの繰返しは、統一感よりも単調さにつながるであろう。個々の家の個性あるデザインと、全体として均質なデザインを基調としていることが、高山の町並景観を魅力あるものにしていく。

色調 町並景観を考えると、色調による統一感を無視することはできない。けれども、色調については十分な調査を行っていないので、ここでは気付いた点をあげるにとどめる。

町並景観の基礎になっているものは、風化した木の材質感と、黒っぽい灰色（仮に以下古色と呼ぶ）である。落ち着いた古色に変化を与えているのは、庇腕木先端の木口に塗った白土である。町家の正面には壁は少ないが、少いだけに白壁は色調の変化のポイントになっている。

落ち着いた古色は、白木のまま年月を経たものではなく、各種の塗料によるものである。例えば春慶塗のこしかすを柱・建具に塗るし、ペニガラとススをまぜた塗料もある。これらの塗料とイロリのススのいぶしとで、長い間に木材は栗色の色調にかわってゆく。

こうした塗料や、庇腕木先端の木口に塗った白土などは、禁令に触れる材木を使用しているのを隠すためとも言われる。

昭和初期以前の建物は、上に述べてきたような有機質を基調とした色調であるが、最近の建物はこうした伝統的な色調とは全く異なる。モルタルの壁やアルミサッシの銀色、赤や青のトタン等を用いた屋根・雨樋など、無機質・金属質の色感をもつ建物が多い。

町並景観にまとまりや、変化を与えている他の構成要素を抽出してみよう。

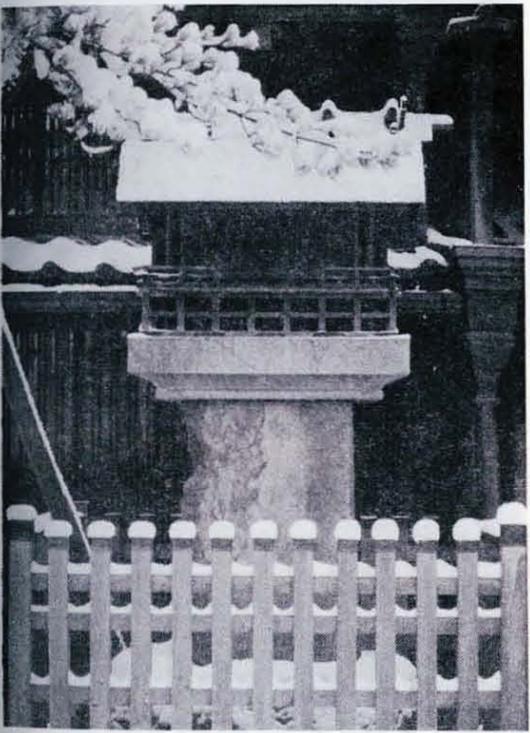
視点 町並景観は、視野の遠方や焦点となるところにシンボルとなる物体があると、そのまとまりが付き、統一感が強くなる。恵比須台組の町並では、南端で道路がT字形に交叉する地点に、伝統的様式による家があり、この家が焦点となっている。北では道路がやや折れ曲るので、同様の効果が得られている。調査地区内の他の道筋では、このように視野の焦点に、顕著な物体がある状況は認められない。恵比須台組は、このように視野のまとまりがあるという好条件に恵まれていると言えよう。



2-25 視野をまとめる町家



2-26 屋台蔵



2-27 秋葉社

点景物 高山の町並景観にふさわしい点景物として、屋台蔵と秋葉社がある。屋台蔵は間口にくらべて高さが目立ち、前面が土蔵風で白壁であるので、中二階建の町家が並ぶ中では際立つ建物である。また屋台を曳き出すスペースを屋台蔵の前にとるので、屋台蔵は道路から奥まって建つ。このように屋台蔵は町並の中では特異な位置を占めているのに、町並景観と調和していると見ることができる。これは屋台蔵が、町並をつくり出している町家と同時代の様式の建物であるからである。また高山祭が高山のイメージの中で大きな比重を占め、高山祭の屋台が納っている蔵を、高山にふさわしい建物としてとらえることができるからでもあろう。

次に秋葉社は、度重なる大火を経験した町民が、火災の起らぬことを祈って建てたものである。石垣を積み上げて壇をつくり、その上に神明造の小さい社が置かれる。社は古めかしく、町民にとっては大火を防いできたシンボルであり、現在も崇められている。ひとつの町がひとつの秋葉社を祀っているので、高山の町を歩くとところどころで見かける。点在する秋葉社は、高山の町並景観に趣きをそえている。

付帯要素 次に、町並景観を構成するもののうち、電柱・生垣・メーター類・ショーウィンドウなど、本来この町並になかったものの取扱いについてのべよう。

大規模な間口の町家では内庭を持ち、それを塀で囲うことはあるが、その場合は塀が町並景観を構成する。最近では、主屋を道路からおくまって建て、その前に庭をつくり、前栽や生垣を設ける例がある。厳密に言えば、これらは高山らしくない要素である。しかし町並にそぐわない新しい建物を建てるよりはましであろう。塀を設ける場合には、町並にふさわしい形式・材料・高さ・色調など工夫したデザインであることが望まれよう。

町並景観を構成するもので、町家に付属するもの、例えば看板・メーター類・ガスボンベ・郵便箱・自動販売機・柵・犬矢来等について触れておこう。

まず看板を取り上げる。看板は伝統的な看板と、最近の看板との両者が見受けられる。前者は町並景観に好ましく、効果を増すが、後者は一般的には町家正面のデザインを破壊している場合が多い。後者の例で、例えば洋品店・理髪店・美容院などが新しいデザインで正面を作り、看板も町並に調和しないものをかかげている例が目立つ。住民の生活にとって必要な店舗ではあるが、必ずしも看板が町並景観と調和しないような新しいデザインである必要はなく、むしろ全体の町並景観にふさわしいデザインが考慮されるべきであろう。店舗のショーウィンドウについても同様である。

メーター類・郵便箱・自動販売機なども、それぞれデザイン・色

調の工夫が必要である。高山では、例えばプロパンガスボンベを竹の柵で囲ったり、冷暖房機器を格子で囲ったりして、町並景観の統一感を維持する工夫をして、それに成功している。自動販売機・郵便箱なども町並にふさわしいデザインと色調があって当然であり、この点の工夫も見受けられる。例えば自動販売機を黒系統の色でまとめるとか、郵便箱を赤いボックスではなく、木製の箱で木地をみせて設けたりする例がある。

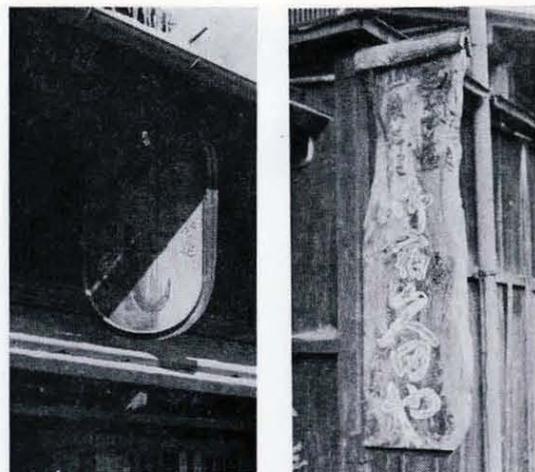
町家の前に設けている柵・犬矢来・敷地境に設けている柵などは、もともとは無かったと考えられる。柵・犬矢来は観光客などの増加によって、主屋の軒下スペースに観光客が入らないようにし、建物を保護する機能をもち、また敷地境の柵は各戸の敷地を明確にして、互いの独立性を明らかにしているように思われる。これらの工作物はほとんど木製で、町並景観に調和して設けられているので、現在見られるようなデザインを基調とするならば、特に問題はないだろう。

町並景観の変遷 町並景観の現状を述べて来たが、最後に町並景観の変遷について考察しておこう。まず、町家正面の復原によって得られる町並景観をもとに、その変遷を辿ることにする。

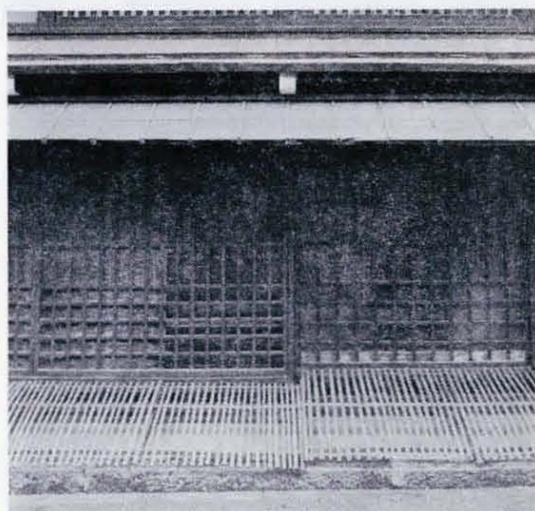
江戸末期の天保3年(1832)の大火災は、調査地区全域と下町の一部を全焼した。町の再建が始まり、伝統的に受け継がれてきた間取りと様式で次々と町家が建てられた。富裕な町人たちは、蓄積した財力を惜しげなく建物につぎこんだ。地割と道路パターンはほぼ踏襲された。土埃りが舞う道には、側溝に流れる水を汲んでの毎日の打水が欠かせなかった。新築した町家が道路の両側に並ぶ。軒高が揃い、正面はシトミの家ばかりであった。町家は前面の柱通りがどの家も揃っていて、各家の敷地を区別する境界には木の塀などはない。軒の出が深し、妨げになるものがないので、軒づたいに歩けば、雨の日や雪の日には濡れずに町を通り過ぎることができた。町並景観に変化を与えていたのは大店の「おくみせ」正面に設けられていた出格子ぐらいであった。

商品の出し入れや、店を開けた時には、シトミが取払われ、「みせ」の正面は開放とした。通りを歩く人々は、「みせ」に並べられた商品を見ることができた。「みせ」と「おえ」の境にあたる「どじ」には屋号を染めぬいたのれんがかかり、商い以外で家を訪れる人は、こののれんをくぐって訪問を告げるのである。

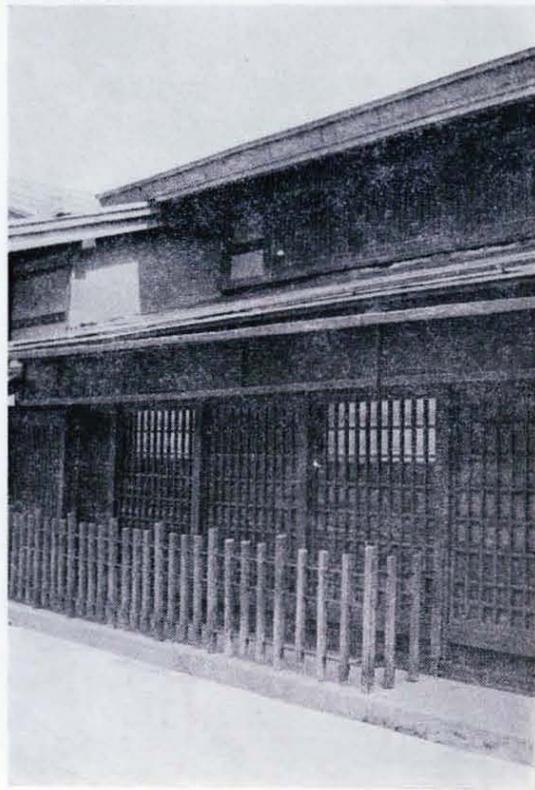
明治の中頃から末頃にかけては、維新の変化がやっと生活の変化として高山にもあらわれ始めた。戸締りに手間がかかり、暗いと言うことで、シトミは次第に減り、格子をはめ込み、内側に障子を入れる家があらわれる。格子は急速に普及して、格子が高山の町並景観を構成する重要な要素になってくる。



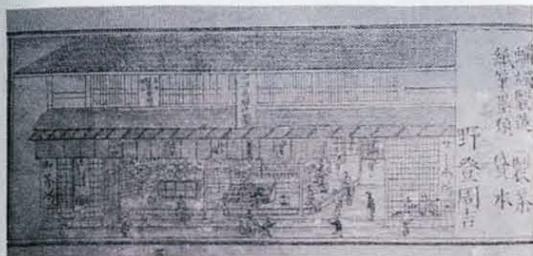
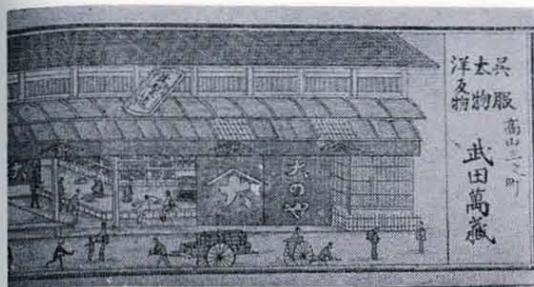
2-28 古めかしい看板



2-29 犬矢来



2-30 柵



2-31 明治22年「商工技勢飛驒之便覧」にのる町家



2-32 高山古写真（昭和初期）



2-33 こけら葺の庇とふきかえ作業

中二階にある天井の低い屋根裏部屋は物置や使用人の寝る部屋であった。この部屋は次第に家人が生活する部屋にあてられるようになる。新築する家では軒を高くし、中二階の天井を上げて部屋をつくるようになった。中二階が高くなるほかは、一階の間取りに変化はなかったし、「おえ」の吹抜も受け継がれた。

昭和初めに高山市となり、高山本線が開通すると、新しい文化と生活様式が急速に高山に及んでくる。中二階は本二階となって部屋がつくられ、二階の格子はなくなっていく。

高山本線の開通以後、商業活動の中心が三町筋から宮川西岸へと次第に移り、三町筋ではかつて繁栄した町の面影は薄れていった。商売をやめる家が増え、昔の店舗は住宅へと変化し、いわゆる「しもたや」が並ぶひっそりとした町になった。地割も道路も大きな変化はなく、町並景観は昔の姿を保った。

太平洋戦争終戦の前後に、道路が各所で拡幅され、しばらくは土埃りが舞っていたが、次第にアスファルト舗装にかわっていった。新しい道路も設けられ、宮川に橋が新たに架けられた。新しく拡幅された道路の両側には、伝統的様式の町家もあったが、新しい様式の商店が建つ方が多かった。また昭和22年には消防法が改正され、防火のために一斉に板葺からトタン葺へとかわっていった。昭和初期に本二階になるという町家の変化があったし、戦争直後の道路の変化・屋根葺材の変化は町並景観を大きくかえてはいるものの、高山の町並は決定的には崩れずに昔ながらの雰囲気を保った。

新しい生活様式は格子戸をガラス戸にかえた。大戸が取払われ、ガラス戸の引違いを採用する家が増えていった。「みせ」にはショーウィンドウが設けられ始めたし、古くからの看板も、宣伝効果を大きくするため新しい看板にかわっていった。町家の前面を覆ってしまう巨大な看板を掲げる家も多くなった。伝統的な様式とは異なる、どこの町や都市にも見受けられる店舗や住宅が建てられていった。それは建築基準法や都市計画法によって、従来の伝統的様式による新築は不可能であるという面もあった。車の普及によって車庫や駐車場をつくる必要が生じ、古い町家が取壊わされたり、改造されたりしていった。

昭和30年代までは町並の変化はゆっくりしたものであった。急激な変化の徴候は30年代後半からである。全国各地で新しい都市づくりが進められ、同じような景観の都市が各地に生まれて、その傾向が高山にも及んだ。けれどもこの時期は、一方では観光客が訪れ始め、高山の良さが語られるようになった時期でもある。商業活動の中心が移ったことは、古い町並景観が決定的には壊されなかったひとつの要因であった。

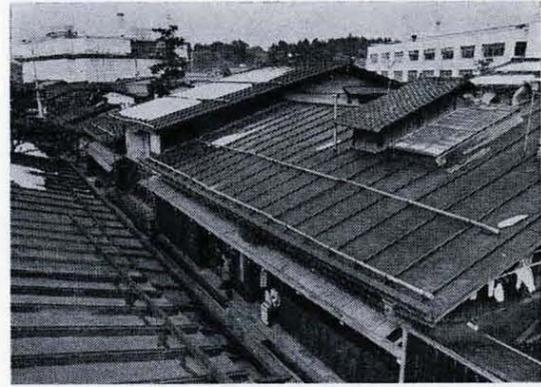
急激な変化の徴候は常にみられたが、古い町並のよさがわかってくると、町並景観を維持しようとする努力が住民の間で払われるようになった。このことはすでにみてきた。近年では新築であっても、古い様式のデザインを採用している家が見受けられるようになっている。

保存の方向 高山の町並景観は、近年まで伝統的な雰囲気を保っていた。急激なテンポの変化は、昭和30年代の末頃からである。これまで述べてきたことからわかるように、高山の町並の変化は、ゆるいテンポで進んできた。市街地の発展、道路の改良、新しい生活様式も、しだいに町並の変化の中へ溶け込みながら、吸収されてきた。

景観にそぐわない新しいデザインや建物の形態は、自ずから取捨選択されてきた。町並景観と異なるデザインで建物を新築したり、改築することは考えにくかった。高山では、このような住民同士の暗黙の了解が他の諸都市にくらべて近年まで生き続けてきた。不文律の了解事項を押し流す程の強さと速さで町並の変化の徴候が見られるようになったとき、住民はこの了解事項を、町並保存についての規約として明文化し、町並保存会を結成した。

現在の時点での町並保存の考え方の一つとして、伝統的な町並景観をこわす急激なテンポの変化を止めて、町がゆっくりと変化してきた、そのテンポをこれからも維持してゆこうとする方向がある。このような町並保存においては、これまで不文律であった了解事項を明確にして、町づくりをしていくことになる。

高山のこれまでの町並の変化と、町並保存の方向は、こうしたことを教えてくれているように私達には思われるのである。



2-34 町並に調和しない建物の遠望